

追 悼 の 辞

本日ここに、御遺族や御来賓の皆様の御参列をたまわり、本市の戦没者、殉職者七千二百三十二柱ならびに一般戦災死没者百一柱の合同追悼式を挙げるにあたり、謹んで哀悼の誠を捧げ、心から御冥福をお祈り申し上げます。

顧みますと、昭和二十年の終戦から、八十一年目の夏を迎えました。

また、本日、八月六日は、本市が大空襲を受け、市街地の大半が焦土と化した悲慘な歴史を刻んだ日でもあります。

歳月が流れてもなお御遺族の皆様の深い悲しみは、決して消えることはなく、その心情を拝察いたしますとき、お慰めのことばもございません。

私たちが今日、享受している平和と繁栄は、明治以降の幾多の国難に際し、国内外の苛烈を極めた戦闘の中で、祖国の安泰と愛する家族を案じつつ戦場に倒れた方々、激しい空襲によって命を落とされた方々、公共の安寧のために殉職された方々の尊い犠牲の上に築かれたものであります。

また、かけがえのない肉親を亡くされた悲しみに耐えながら、多くの苦難に立ち向かい、家族を守り、今日まで歩んでこられた御遺族皆様方の努力の賜物であります。その御労苦に対し、衷心より敬意を表する次第であります。

さて、世界を見渡しますと、依然として他国を犠牲にして自国の利益を追求する覇道が紛争を生み、報復の応酬が繰り返されており、平和への道のりは険しいものがあります。誰もが平和な社会を望んでいるものの、平和の実現はより複雑な課題となっております。

このような国際情勢のなか、国内に目を向けますと、石油調達等が不安定なことなどにより、物価上昇が続いており、依然として物価上昇に歯止めが利かない状況であります。

また、日本全体では、少子高齢化や人口減少が急速に進み、地域社会の持続可能性が心配されるなど、政治や経済の先行きへの不安が一層広がっております。

このように世界も日本も先の見えない困難な時代に直面しているからこそ、戦火の中で失われた数多くの命に思いを馳せ、平和であることの重みを今一度噛みしめなければならないと痛感しております。

昭和から平成、そして令和となった今、国民の大半が戦争の悲劇を知らずに育った世代となりました。そのような中、本市では、「本市が持つ三つの宝」の一つである「人間力あふれる子どもたち」を輝かせる施策に引き続き取り組んでおり、本日は有水小学校の児童の皆様にも参列いただいております。

未来永劫、悲しみの歴史を繰り返すことのないよう、過去を謙虚に振り返り、悲慘な戦争の教訓を風化させることなく、これからの世代につないでいくことは、今ここに生きている私たちに課せられた重要な使命であります。

結びに、戦没者、空襲犠牲者各位の御霊が、永遠に安らかでありますこと、そして、今後とも、わが郷土、都城の繁栄と平安を見守りくださることを願い、併せて御遺族をはじめ、御参列の皆様方の御健勝と、御多幸を祈念申し上げ、追悼のことばといたします。

令和八年八月六日

都城市長 池田 宜永